Ⅳ　生活　２年次の成果と課題

1　成果

(1)　子どもの思いや願いを育み，意欲や主体性を高める学習活動の展開

子どもの思いや願いに基づいて必然性のある学習活動を展開し，試行錯誤する活動を設定したことにより，日々の学習活動の中に省察の活動を繰り返し位置付けることができたことが成果である。

２年「めざせ！野菜名人」の実践では，子どもたちがそれぞれ異なる野菜を栽培する活動を行った。毎日の水やりや追肥，支柱を立てるなどの世話を繰り返すうちに，「ミニトマトもナスもピーマンもキュウリも，どれも花が咲いたところに実がなります。別の野菜もみんな同じです」「でも，つるが伸びるのはキュウリだけです」など，植物の斉一性や多様性に気付いていった。また，野菜の種類によって生長の仕方や時期が異なることから，それぞれの野菜に適した世話を，季節や時期に応じて行うことができた。

生活科における学びの中で，比較・分類・関連付けるなどの過程を意図的に設定することにより，自他の対象への関わりの現状を把握することができた。さらに，友達からの質問や助言を基にして試行したり，予測したり工夫したりすることによって，次の活動や行動への見通しや筋道を創り出していくとともに，自らが選択した対象に，よりよく関わろうとする意欲や態度の向上へとつながった。

このように，子ども一人一人が対象に意欲的・主体的に関わったり，日常的に省察したりすることは，対象への関わりや気付きを深め，活動をより充実させていくことにつながると考える。

(2)　体験活動をより豊かにするための表現する活動の充実

生活科において「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」を育成するためには，単に思いや願いを実現する体験活動を充実させるだけではなく，表現活動を工夫し，体験活動と表現活動とを豊かに行き来することによって生じる相互作用を重視するなど，気付きの質を高めることを意識した単元構成にすることが大切である。

気付いたことを伝えたり，交流したり，ふり返って捉え直したりして表現する際には，言葉・絵・動作・劇化などの多様な方法によって表現することにより，無自覚な気付きが自覚的になったり，ばらばらのように思えた気付きが関連付けられたりすると考える。そこで，気付きを自覚し関連付けていくために，体験活動の充実とともに，表現活動の充実を意識しながら授業を実践した。

２年「めざせ！野菜名人」では，野菜の生育条件に着目し，成長を友達と比べたり，自分なりの考えをもって野菜に合った世話を試したりしながら，野菜の成長の様子や違いについて考えるという「見方・考え方」を働かせることを意識して単元を構成した。「どうして，同じ野菜なのに･･･」「ぼくの野菜はほかの種類に比べて･･･」といった，子どもの困り感を共有し合う場を初めに設定した。誰もが「自分の野菜をよりよく育てたい」という必然性をもちながら互いに表現し交流し合う姿が見られた。

このことにより，一人一人が自分事として他者の困り事に真剣に向き合いながら解決方法を調べたり，よりよい世話の仕方を試したりすることでより豊かな体験活動へとつなげることができた。さらに，より体験活動が充実したことによって，子どもたちが表現したい，という意欲の高まりへとつなげていくことができた。

表現する活動を効果的に行うことは，体験活動をより豊かなものにすることになる。そのためにも，子どもたちにとって必然性のある話合い活動を，実態に応じて適切に取り入れていくことが，何よりも大切であると考える。

2　課題　思いや願いを大切にしながら，自ら追究していく子どもを育てる単元構成の在り方

生活科では，子ども一人一人の思いや願いの実現に向けた活動を展開していく。そのためにも，子どもの思いや願いを重視しながら，事前に環境を整備したり活動に導いたりする必要があると感じている。

対象に主体的に関わり続ける学びを展開するに当たって，子どもが対象への思いや願いをもとに，対象にどのように関わるのか，自らの関わり方についての見通しを子ども自身が具体的にもっていることが大切であると考える。そのためにも，好奇心や探究心，興味や親しみ，憧れなどをもつことができるような，導入場面における対象との出会わせ方の工夫が必要である。

対象と出会う場面で，子どもたちが「やってみたい」「知りたい」「できるようになりたい」という事象を提示する。また，対象に自由に関わり試行錯誤をしていく活動を通して，子どもたちの気付きや疑問を取り上げ，共有していく。子どもの思いや願いをもとに課題を引き出し，子どもたちが自ら「見方・考え方」を働かせることができるように単元を構成していくことが大切であると考えている。

このことによって，子どもの知的好奇心を引き出し必要感をもった学習活動を展開することができるであろう。また，自らの考えや予想を基にしながら，よりよく対象と関わるために修正したり工夫したりといった「省察」と，それにつながるフィードバックの獲得を子ども自身が意識的に行うことができるようになると考える。